

せいけん
詩集

第四十二篇

作：近藤せいけん

「旅路」

遠く旅に出て 故郷を想う

水音を聞きながら 横になり

しんしんと 旅の宿

廊下を踏む 幼子の足音 遠ざかり

静かさが帰ってくる

さびしさが心に 沁みてる

山奥の一軒宿

ああ 家人の顔

浮かんでは 消える 夜半

一人 山道をゆき 踏みしめる

溪流のせせらぎを 友に

ただ 歩く

いつ 帰ろうか 故郷の町に

浮かぶ 父 母の顔

さびしさが心に 沁みてる

尾根を過ぎ 見えてくる

里人の焚く 一筋の煙り

人 恋し 家人 恋し

遠い 旅路

